

中国山東省出土石仏の諸相—如来像を中心に—

岩井共二（山口県立美術館）

中国山東省では、1970年代後半から近年に至るまで、青州・博興・惠民・諸城・済南といった地域から、南北朝時代6世紀の石仏が多数出土している。これらは東魏(534～550)から北斉(550～577)にかけての造像が多く、ヴァリエーションが多彩である上に、鮮やかな彩色が遺るものが多い。近年、山東省出土石仏は、1996年に発見された青州龍興寺址窖藏出土の石仏を中心に日本国内でも公開され、図録や美術全集にも良質な図版が掲載され、注目を浴びるようになってきた。興味深いのは、北魏後期から東魏時代に見られる中国式仏像と、北斉時代に見られるインド式仏像という対極的な作例が存在している点である。本発表では、このような対極的な形式が6世紀の数十年間で盛衰することの意味に着目したい。

発表者は、北魏後期に出現する如来像の中国式服制（袈裟を着ける際に、胸元を広く開けて、袈裟の末端を左肩にかけずに肘にかけて外に垂らす着衣形式）は、仏教が中国社会に浸透する過程での「自然発生的現象」ではなく、南北朝時代に盛んになった「三教交渉」の中で儒教・道教側から出された僧侶の服制への批判という「強制的要因」によって出現したとする説を出したことがある。中国式服制は単なる「中華趣味」よりも強力な「反西方的中華趣味」ともいべきムーヴメントに起因するという位置づけである。

このように中国式服制を捉えれば、青州や諸城で見られるインド式仏像の出現は文字通り「インド趣味」という中国式服制と相反する現象である。山東地域で見られるインド式仏像は、インド・サールナートのグプタ様式や、南インドのアマラーヴァティー様式、あるいはそれらを吸収した東南アジア様式の諸要素を吸収して形成されたと考えられている。このようなインド式仏像の流行現象は、北斉時代における「反漢化」ムーヴメントとも関連づけられている。中国では仏教に対して「インド的なもの」を求める側と「中国化されたもの」を求める側の双方が存在し、この二つの対立する欲求の強弱によって、外来要素が受け入れられたり拒絶されたり変容したりする。北魏後期の中国式仏像と北斉のインド式仏像の存在はこうした現象として捉えられないだろうか。南北朝仏教美術における様式変化の要因は、流入する外来様式の分量の問題だけでなく、それを受け入れる側の意識の問題でもある。

発表者は、昨年、青州市博物館や諸城市博物館等が所蔵する石仏を実見する機会に恵まれた。本発表では、山東出土石仏の如来像を中心に、上述した「反西方的中華趣味」と「インド趣味」との対立・融和という視点から、山東地域造像の特徴を紹介する。